せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 ☎42-2590
第150号・平成14年3月1日

年表で読む 古平の歴史

《56》

海運の移り変り

■古平～本州間の航海

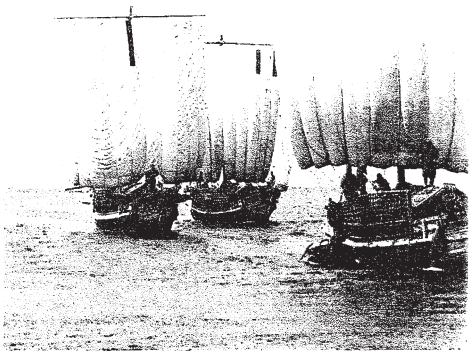
古平から本州へ荷物を運ぶ帆船はどのくらい日数がかかり、また、本州からどんな品物を運んで来たのか、次の浦証文（浦切手・浦手形ともいう）から知ることができます。

これには、古平から福井県敦賀港まで約二か月かかり、古平へ戻る途中、青森県小泊港で遭難したときの様子が詳しく書かれています。

浦証文の事

この船の船主は古平郡弁才泊（入船町）の佐吉で、船頭豊次郎、乗組員ほか乗客、合わせて二十八人が乗り、鰊製品を積んで五月十六日古平を出帆しました。七月十四日敦賀に入港し製品を販売、そこで茶を六十斤（三十六キロ）、麦五俵、ろうそく六十本入り五箱、縄七十五丸、むしろ一五〇束、塩百俵を積み込んで、七月二十四日出帆しました。八月八日酒田に入港し、十二日出帆、その日の内に加茂に入港し、そこで米五斗（重量で七十五キロ）入り二百八十俵、酒百樽、奈良漬五樽を積み込み、十九日出帆しました。古平へ向かっていたところ風の具合が悪く、すぐに青島に入港しました。二十一日そこを出帆したところ、北東の風が強く大時化になったので、秋田船川に入港し、二十三日出帆しました。沖合いまでは逆風で走っていたところ、二十七日に北の風に変わり大風になり、致し方なく小泊に入港し日和待ちをしていたところ、九月三日夕方になり、突然、強い西風になりました。いかりを残らず打ち込み船を留めようとしましたが、夜中になってにわかに北東の風に変わり、大時化、高波に襲われました。乗組員一同身命をかけて働きましたが、何分夜中のことで思うようにならず、翌四日明け方になり支えの杭が折れ、浅瀬に乗り上げて戸立てが破損し、水船になってしまいました。種々手を尽くし繋ぎ留めようと努めましたが、風はますます強く波も高くなり、ついに縦に破損し、浜へ打ち上げられ破船となってしまいました。この様子に当所港掛り、村役、問屋の人夫など大勢が来られて助けられ、無事上陸することができたのは大変有り難いことでございます。また、お指図により濡れ米百九十俵、酒四十五樽、縄三十八丸、むしろ九十四束、そのほかいかり、破船の木材、着替えなど集めていただき重々有り難いことでございます。七日より波も静かになりましたが、ここは潮の流れが速いところですので、多くは流失してしまいました。濡れ米、酒はお助けいただいた方々へ差し上げますが、残りは問屋などへ預け、便があり次第国元へ送りたいと思っております。以上申し上げましたことをお聞き届けの上、お指図をお待ちいたしております。国元の船主へは破船のこと、浦証文

※（九ページ四段目へ続く）



<日本海沿岸を航行する北前船の船団>

浜の世相を見る

高野名幸作さんの日記から

【51】

＜大正九年＞

6／13 農園を見廻る、リンゴは上作だが畑の上の方はコフキゾウムシにやられた、なかなか恐ろしい虫だ、腐乱病になっている樹の皮を取り除く、東京から会社の販売員が来て、防水剤の特約店になってくれないかとの話だが、商売が違うので断る、鰊製品が下落している。

6／14 料理の講習会が禅源寺であるというので妻が出かける、来る二十日、在郷軍人分会と青年団合同の運動会が、㋑干場であるというので寄付集めに来る、十円寄付をした、

6／15 鰊製品の下落が続く、高値のときの約半額になってしまった、手持ちの製品を売り惜しんでいるので金回りも良くない、入船町方面へ行ったら話の中で、今秋から鱈釣組合でヤメ糸を買いたいので勉強してくれと言われた、極力勉強するつもりだ

6／18 美国へ掛け取りに出かけたが、どこも鰊製品の値下がりで閉口している、今朝、前浜へイワシが寄って来て浜に揚がったというので、浜は大変な人出で大騒ぎ、せっかくの鰊大漁もこの暴落で景気も悪くなった。

6／19 明日は旧の節句なので、今朝早く起きて鯉を揚げる、本へ行きリンゴの話をしたが、沖村、本陣の沢は良いとのこと、大久保より奥の方の畑は虫で全滅とのこと、午後、役場へ行き除虫菊粉を買って来る、農会の試験畑から本支店や、松尾、種金の畑を廻って見たが虫の害のひどいのに驚いた、今日もまたイワシが揚がったというので浜は大騒ぎだ。

6／20 きょうの暑さ七十五度F（約二十四度C）、朝早く花火が揚がる、勇ましいラッパの音も聞こえる、今日は軍人分会と青年団の合同運動会の日だ、自転車競争もあり大した人気だ、㋑山口干場から沖村までのマラソンもあり、一着は四十五分ぐらいだったという、自転車の一流一着は分吉田、二等鈴木、三等納谷の職人だったという、七時に散会、随分盛大だった、夜は新開町で浜町芸者連の踊りがある。

6／22 三山神社のお祭りだ、昼前に家の前を行列が通った、夜はちょうちんをつけての行列で賑やかであった。六十六段の階段を上って三山神社まで行ったが、境内では相撲大会が行われていて賑やかだった。

6／25 明け方雷雨があり大雨になったが、九時ころから晴れてきた、農園でナスや花苗の植え付けをする、店は閑散としている、鰊製品の値下がりで浜方は不景気、店の方は入金もなく困っている。

7／17 午後一時から禅源寺で、尼港殉難者追悼会があり行く、参詣人も大勢来ている、日蓮宗僧侶三人の講話があり、五時に帰る。

7／18 寒暖計は八十度F（約二十七度C）、六月二十日からのリンゴ、ナシの袋掛け終わる、夜、余り暑いので新開町に散歩に出て、子どもたちと氷水を飲む、子どもたちも大喜びだ。

7／20 寒暖計は八十五度F（約二十九度C）、夕方浜辺を散歩し、戸外にいすを出して涼む。

7／21 このところ連日の暑さで、今日は八十七度F（約三十一度C）もあり、暑さが一段と厳しい。

7／29 六人で家の井戸掘りにかかっている、警察と役場が共催でハイ取りの宣伝に町内を歩く、馬車二十台余りに六年生以上の生徒を何人か乗せ、ちょうちんをつけて、唱歌を歌いながら町を廻っている、その後を自転車も二十台余りが続き賑やかであった。

8／4 未明から大雨が降

り出す、九時ころには盆を覆すような大雨になり、沢江の仮橋が流されるというので大騒ぎ、十時も過ぎると一天ぬぐうが如くに晴れ上がった、江差、函館方面ではイカが大漁だそうだが古平ではさっぱりない。

8／9　いよいよ明日は道会議員選挙だ、小樽から岡崎主人が仲谷候補と共に来る、本に寄り話をする、十一時過ぎ発動機船で帰る、笠島派の六人も本に寄る、敵味方入り乱れての大混戦だ、二時から禅源寺で政見発表演説会があり聞きに行く。

8／13　道会議員選挙の結果、当選は丸山・沢田・樫原・阿部・笠島の五人、落選は山内・仲谷の二人で、古平の有権者は百十六人、仲谷は古平で四十三票、笠島は四十六票、仲谷は百九十七票で落選だった。

8／18　朝からの雨で、これで雨は三日も続いている、夜墓参をする、帰り港町弁天さんの祭礼で芸者の手踊りがあるというので見に行く、大勢の人が集まっている。妻も子どもたちを連れて見に行った。

8／19　朝夕は涼しくなった、中庭のアサガオが五つ咲いている、久しぶりの快晴だ、農園へ行ってキビをもいで来る、子どもたちはバッタを取ったり池の金魚を見て遊んでいる、農園が一番楽しそうだ、夜、墓参する、これ程盛んなのは他に余りない美風だと思う。

8／21　美国へ掛け取りに行く、八時に出発し新地に自転車を預ける、日が輝き暑さが厳しい、汗がひどく扇子もハンカチも役に立たない、五、六軒廻り笹山さんで昼食後、二軒程寄り三時に帰る、夜、崎長へ十六歳の娘さんの通夜に行く、気の毒なことだ。

8／22　九時から学校で信用組合の総会がある、出席者一三〇余名、二時に終わる。

9／1　今日は二百十日だが晴天でしかも風も無い、学校の夏休みも終わり今日が始業式だ、子どもたちも毎日のように海に行っていたので真っ黒、丈夫な顔で学校へ行った、暑さも厳しく八十度Fぐらいもある、学校で午後一時から、伊豆陸軍少将が来て、乃木将軍夫妻の事跡を讃えた講演会があった、大勢が集まっていた、皆感動を受けた、四時に帰る。

9／3　朝、農園へ行ったが雨が降ったような朝露だ、花もきれいに咲いている、午後一時から禅源寺で松雲画会があるので見に行く。

9／7　小樽へ軍艦が入り見物客を乗せて発動機船が出るというので、子ども二人を連れて行く、二人とも大喜びだ、一時に出発したが上ナギで、子どもたちも酔わなかった、港内には四十隻余りの軍艦が入っていて、市中も大賑い、岡崎宅に泊まる、夜は小学生のちょうちん行列があり、水天宮参道まで見に行く、軍艦からは探照灯の灯り、街はちょうちん行列、実に壮観だ、帰りは石段が大混雑、二人を連れてようやく帰る。

9／8　起床七時、港の方を見ると沢山の軍艦で実に勇ましい、波止場へ行くと軍艦見物のハシケが何十隻も行き来している、ハシケに乗り、引き船に引かれて戦艦扶桑に着き見学する、随分大きいのに驚く、十一時ごろ波止場へ戻る、岡本病院へ見舞に寄ったが雨になる、夜は電気館で活動写真を見る。

9／9　雨に海は時化で古平には帰れぬので、小樽へ滞在する、本屋や他の商店を見て歩く、街は賑やかで子どもたちは大喜びだ、水兵が沢山上陸している。

9／17　井さんと中町、新開町、畑町などを歩く、午後二時から役場で国勢調査協議会がある。

9／18　沖村大謀でサバが大漁、大安売りで町中を売り歩いている。

9／19　初霰が降る、もう初秋の景色だ、朝夕は寒いくらいだ、今月初めは単衣に扇子を離さなかったのに、火鉢が恋しいようだ、今日は競馬会の二日目だ、子どもらと見に行く、見物人は大勢だったが馬が不足とのこと、恵比須神社の夜祭りがある、明日は境内で花相撲があるそうだ。

9／23　起床六時、朝まで雨が降り続く、彼岸の中日で寺

参りする人が多い、トラホーム検査があるというので役場へ行く、雨と風が強くリンゴが落ちるだろう、中日なので赤飯の馳走がある。

9／29 国勢調査のため六時から受け持ち区域を廻る、午後六時ごろまでかかる、本に寄って国勢調査についての話をする、明日、調査員一同で写真をとる日だ。

10／2 国勢調査の整理に朝七時から夕方までかかる、役場へ申告書を提出してこれで重任を果たした。

10／4 このごろは秋風が立ち、気候も良く心地良い、阿部さんの畑へ行き、リンゴの値段を聞いたが随分と安い、ここのリンゴも小さい、例年だとこれはクズ物だが、今年は一般に小粒だ、藤川さんへ行くと、漁場の家財道具が売りに出ているから見に行かないかと言う、テーブル、石うす、下駄など十二円程買い物をする、二、三年で家財道具を売りに出すとは、人のカマドはわからぬものだ。

10／5 朝夕一時間ぐらいずつ日が短くなったようだ、雨が降り、風も寒く海は大時化、七から大謀用のロープなど二七〇円程の注文があり、馬車で届ける、夜、熊さんと二階の障子張りをする。

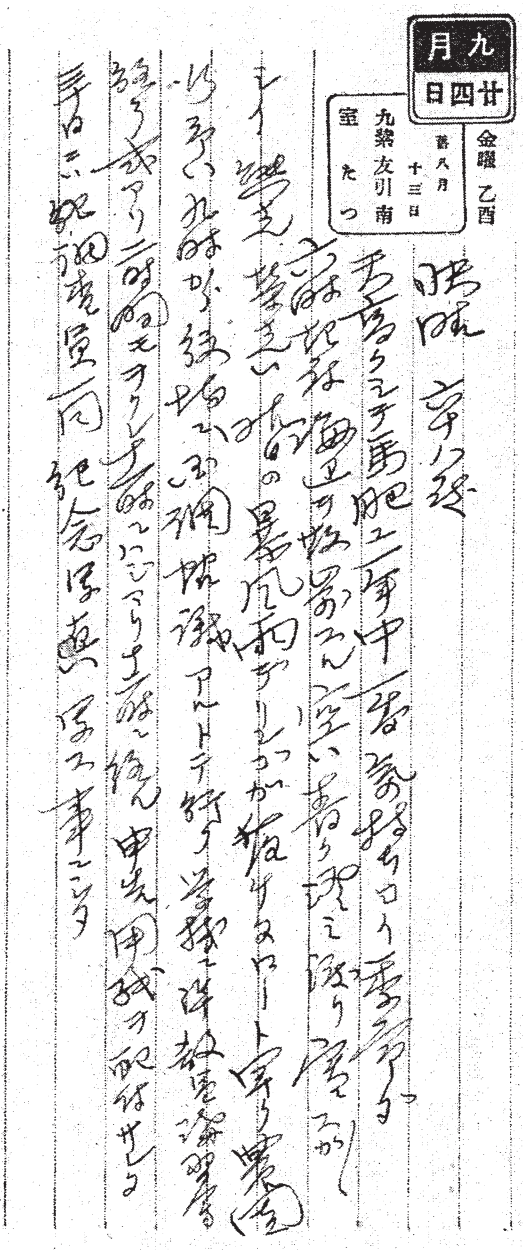
10／6 今日は朝からの好天気、リンゴもぎに行ったが、今年は未曾有の虫害の激しい年であった、上の畑はひどく、中畑は葉が枯れて粒が小さい、下畑は虫害が余りなく相当の出来だ、毎年、害虫がこんなに出るようでは、リンゴの前途も悲観せざるを得ない、イカ大漁でロープが売れる。

10／7 女の出面を頼んでリンゴもぎをする、一号一五〇〇斤、七号五〇〇斤、合計二〇〇〇斤（一二〇〇キロ）程で、これでは例年の二分作だ、今年のように害虫の多い年も稀だ、本の畑では皆無のところもあるという、本の群来村の大謀起こしでブリ一〇〇本余り、マグロ一四、五本とれたとのこと、大漁でめでたい、ブリの初物を貰う。

九月二十四日

快晴　六八度

天高クシテ馬肥ユ一年中一番気持チヨイ季節ダ六時起床海辺ヲ散歩スル空ハ青ク澄ミ渡リ実ニスガスガシイ熊サン栄サンハ昨日ノ暴風デリンゴガ落チタロート早ク農園行予ハ九時カラ役場デ国調協議アルトテ行ク学校ニ準教員講習会修了式アリ二時間モオクレ十一時ニハジマリ十二時ニ終ル申告用紙ヲ配布サレタ三十日ニハ調査員一同写真ヲ写ス事ニシタ



磯の香に誘われて

大澤文子

大寒も過ぎ、時折り春らしい太陽が雲間からのぞく頃になると、町の主婦連は落ち着かない。潮が引き遠浅になった岩場には、寒海苔を採る人影が三々五々絶え間ない。

ご多分にもれず姑(ほ)も海が大好き。海草を採りに行くのが年中行事のひとつなのである。

春の日ざしが早々に窓を透す頃になると、姑は落ち着かない。いち早く起き、磯へ行く準備に忙しい。手製の手がけと、履き古しの長靴を用意する。長靴には、すべらぬように縄を巻きつける。手かごの中にはアワビの貝殻を何個も入れておく。常日ごろ姑から「アワビの殻は絶対捨てぬこと」と、言われているので、私はきれいに洗い、必ず手かごにしまいこんでおくのである。岩場の海苔を掻き採るには、アワビの貝殻が一番いいと言う。使っているうちにすぐ欠けるので、それで何個も必要なのだ。

いそいそと出かけて行った姑が、夕方近くには仲間の女の人たちと帰って来る。

寒海苔の詰まった手かごを「ドン！」と土間に置くと、まずお茶でひと休み。やがて、だだっ広い土間の片隅に位置を占め、大きな巾広のまな板の前に座る。手伝いの女の人を相手に、採りたての寒海苔をまな板の上でトントンと打つ。しばらくはリズミカルな音が土間いっぱいに響く。

やがて細かく打った海苔をお椀一杯ずつすくい、半紙大の簾(すだれ)の上に手早く広げる。それがあまり薄いと、天日に干したとき穴があくという。ほどほどに広げて延ばす手加減が大事なのだという。

数十枚の簾に広げた寒海苔は、海沿いの干し場に次々と並べられる。

海水でびしょびしょになった土間の後始末は私の仕事。寒明けの冷たい土間の後始末は、足も手もこごえそう。ほんとつらかった。

やがて、天日に干された海苔は簾からはがされ、穴のない製品はお土産として、姑は、大事に何枚か重ねて二つ折にして置く。それを四角い缶に収めるまでが姑の仕事で、楽しみのひとつなのだろう。

製品にならない穴のあいた海苔は、わが家の副食に添えられる。パリパリとした、歯ごたえのある食感は忘れられない。

× × ×

「おーい！ ねぇさん、持って来たよー」

元気のよい若者の声が朝、戸をたたく。私はあわてて身支度をして戸口を開けた。

「ホラ！ 海雲(もずく)だよ！」

日焼けした若者の笑顔が、かごに山盛りの海雲を差し出した。

「わぁすごい！ ありがとうネ」

山盛りの海雲は黄茶色に艶めき、したたる海水は冷たく私の手をぬらす。

「㊀さん（ヤママス＝大澤家の屋号）の前浜から採ってきたんだよ！」

「ホント・・・・ありがとうネ」

若者は礼を言う私の言葉もそこそこに、走り去ってしまった。

海雲の酢のものはおいしい。湯を通すと鮮やかな緑色と化す。酢のものは、なんの憂いもなく喉元を過ぎる。言うまでもなく常に美しい小皿に盛り、舅(ちち)の朝食の一品として膳に添える。ひそかに舅の箸のすすむのを見守りうれしく思ったことか――。

春が来ると、今でも札幌の食品売り場に海雲を求める私だった。

先号『たま風の吹く季節』の最後「ホーラ、カレッコ焼けるヨー」に続けて、「トックリ返して焼けるヨー」という素朴な滋味溢れる古平弁が落ちていました。お詫びして訂正します。

古平いろはうた

う

うずを巻きイワナの跳ねる廻り淵

町内には、アイヌ語の地名も多かったのですが次第に日本語に書き替えられて、今も使われている地名はごく少なくなってしまいました。

『廻り淵』という和名は昔からの地名であったようで、アイヌの人たちは、この地域には定住していなかったのではないかと思われます。

古平郡の農地の開墾は、主として、東北地方から鰊漁の出稼ぎに来ていた人たちによって行われていました。

畑も自家用の菜園程度で、多くは副業として現在の古平川、チョペタン川、沖村川などの川沿いに耕地が開けていました。

古平川流域では浜中（浜町）の市街地に近いところから順次に開け、青森県から出稼ぎに来ていた武川権七は、明治一五年ころ榎本伝内・高橋与太郎・中野和蔵らと鴨居木川やススキナイ川沿いに入植しました。

明治初年でも、廻り淵はサケの百石場所といわれ、青森県から来ていた佐々木三太はただ一人で入植して、サケを漁獲しながら開墾し、付近で渡し守もしていました。

当時は、廻り淵ではサケを手づかみで獲ることができ、それでここに入植することにした、という話が伝えられています。

その後、明治一九年に古平郡がこの地域の無償付与を受け、入植希望者に貸し付けをしました。それまで土地の払い下げを受けられなかった人は、この未開地を借り開墾に従事したのです。

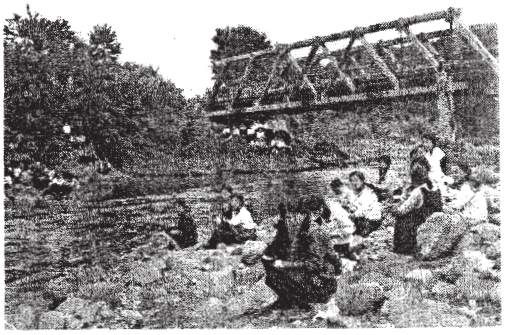
そして、佐々木三太に続いて福井嘉七・中村半蔵・坂上久作・高橋留太郎・堤巳之松・亀井善次・成田豊吉・垣内栄太郎という人たちが、廻り淵開拓の先人として入植しました。

ちょうどこの明治一八、九年は鰊の凶漁であったことから、住民の生活も苦しくなって農業に従事する者が多くなり、郡内の開墾地が急激に増えました。

当初、全道的にもこのような開墾地の多くは借地でしたが、昭和二一年、農地開放に関わる法令によってほとんどが自作農となりました。

廻り淵の周辺は、稲倉石鉱山や手前の観音滝への往来が増えたことで、名前の由来でもあるうずを巻く特異な川の流れと、清流を取り巻く周囲の景観の美しさが知られるようになり、昭和初期の古平観光絵はがきでも紹介されました。また、季節による川釣りを楽しむ人たちもいて、格好の釣り場にもなっていました。

現在は、河畔で釣り糸を垂れる人よりも、付近で春の山菜採りに訪れる人たちの姿が多く見られるようです。



<大正11年竣工・ポニートラス式の廻り淵橋と古平小学校児童の遠足風景＝昭和10年　ころ>

<現在の廻り淵橋>

蝦夷錦誉れも高い素友歌碑

山葡萄もみぢてりはえ
きてはみる
蝦夷のくにはら
にしきをなぜり

日本画家の今中素友（いまなかそゆう）は、明治一九年福岡県に生まれ、川合玉堂の門に入りましたが、二二歳の若さで、当時最も権威のあった文展（文部省美術展覧会）に入選し、昭和天皇のご成婚の折には選ばれて、梅を描いたびょうぶを献上した程の技量の持ち主でした。

大正二年、かねてから面識のあった小町勝治を頼って初めて古平を訪れ、七月から一一月まで禅源寺に止宿して、古平周辺の風物を数多く写生しました。

そして、美しい紅葉の山中にたわわに実る山ぶどうにイメージを触発され、幅一・八メートル・縦三メートルの大作に仕上げ、〈蝦夷錦〉と題して文展に出品し入選しました。これが帝国ホテルに買い上げられ、ロビーに展示されましたが内外からの客にも好評で、素友が画壇に認められる代表作ともなりました。

スケッチした中から、翌年も〈深山の春〉と題した大作が入選したことから古平を懐かしみ、戦後間もない昭和二三年、素友は再び古平を訪れました。

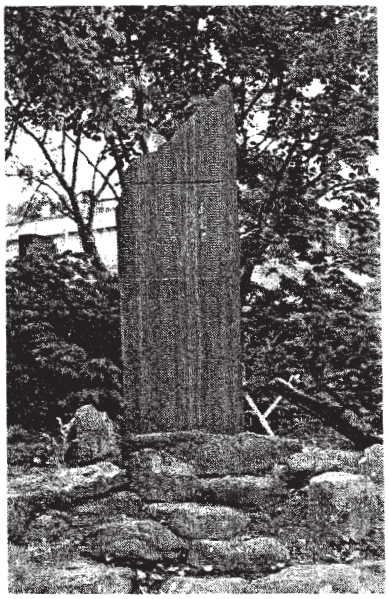
素友は小町勝治方に八月から一か月程滞在し、禅源寺の岳轉和尚、佐々木孝泰、中野雅栄、水見悠々子らと大いに親交を深め、特に佐々木孝泰とは亡くなるまで文通が続きました。

また今回は、絵の制作をしながら古平小学校を会場に個展を開き、絵の販売もしました。その時、絵を買い求めた人がかなりあったと思われますが、その翌年の新地方面の大火で、現在、町内で素友の絵は意外と少ないのではないかと思われます。

昭和三三年春のこと、佐々木孝泰宛てに一通の手紙が届けられました。

「済まないが、近々、紙片に歌一首を書いて送るから、それを小さな石に刻んで、ゆかりの地、禅源寺の境内に建ててもらえまいか。」というものでした。

すぐに快諾の返事を出したところ、折り返し送られて来たのは幅五八センチメートル・縦八〇センチメートルのもので、とても小さい石に収まるようなものではありませんでした。



＜禅源寺境内に建つ今中素友歌碑（筆塚）＞

しかし、古平を心からいつくしみ、あの戦後の混乱期に、絵画を通じて文化的な芽を育ててくれた功績に報いる意味をこめて、中野雅栄・水見悠々子らと図って歌碑建立に取り掛かったのです。

仙台に石碑の製作を依頼し、境内に基礎作りを始めたころ素友は胃病で入院し、病状は思わしくなく、存命中に完成を、と工事を急ぎましたが、素友は昭和三四年八月、歌碑の完成を見ることなく長逝しました。

歌碑の下に愛用の筆数本を埋めて筆塚としましたが、完成したのはそれから二か月後の一〇月一九日でした。除幕式は同月二五日、今中訓夫人、門下や町内の関係者多数が列席して行われ、終わって、故人をしのび懇親会が開かれました。

素友は成子内親王のご成婚記念に、占領軍の総司令官であったマッカーサー元帥へ、記念に贈られた〈くじゃく〉の絵などの大作を数多く残し、また、古平漁港会館に掲げられている〈北海にて〉の作者・三浦白の師でもあります。

三山神社（下）

大正一三年一一月、三山神社の大川社掌が突然行方が分からなくなり、無尽講も破綻してしまいましたが、丘の上に社殿だけが残ってしまいました。

そのころ三山神社の下、今の古平農協辺りに福島オキがいて『山の神』を祀り、ご祈祷をしていました。古平の人は『やまのがみさん』と呼んでいて、占いをしてもらうとよく当たると評判でした。

その福島オキが当面の祭事を行っていましたが、死去後は三山神社も廃社となり、浜町・恵比須神社に合祀されました。

それから間もない昭和二九年九月、猛烈に発達した台風15号が全道を襲い、古平でも大きな被害が出ました。増水によって冷水川にかかる橋も流されてしまったので、台風による大量の風倒木の払い下げを受け、橋を架けることになりました。

ところが工事が完成した後、かなりの木材が余ってしまいました。そこで、営林署に勤めていて工事にもかかわった中野仁三郎さんらが、自分たちが働いている山をつかさどる神である、《大山祇神》（おおやまづみのかみ・おやまつみのかみ）を祀る堂を建立することを思い立ち、その木材を貰い受けました。

そして、山で働く人たちが古平山人会を結成し、会長に中野仁三郎さんが選ばれ、発起人会を作って堂を建設することになりました。これには特に営林署で働く人たちが積極的に協力し、原田吉太郎・北楯八郎がその中心となって多くの人からの支援や援助を得ました。

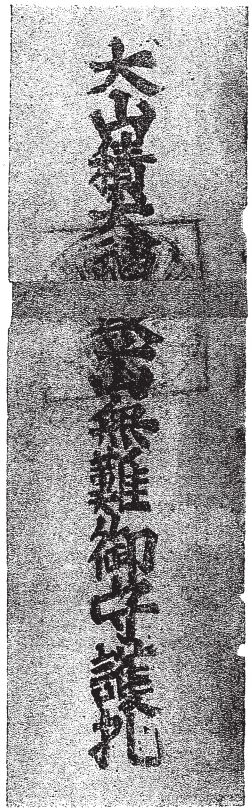
また、山の神の祀られていたところに大山神の石碑がありましたが、それが倒れたままになっていたので、《大山祇神》と碑面を彫り直して堂の側へ設置しました。この石碑は、高さが約二メートルもある大きなものでしたから運搬も大変で、馬車運搬業をしていた佐々木馬車屋（佐々木陸送）の最も力の強いという馬に引かせて、坂道を運び上げたそうです。以前の三山神社に残されていた庚申碑も同時に移設されました。

こうして山人会による大山祇神社が建立され、昭和三〇年八月一四日遷宮祭が行われました。以後、例祭は八月一四・一五日に行われ、宵宮祭には商店からの寄付による花火が揚げられ、年中行事の名物の一つとして祭りの余興と共に人気がありました。

大山祇神社のご神体はまさかりを持った人像で、以前の三山神社のお札には【牛頭天王】と書かれた下に、まさかりを持って座っている人の姿があり、「八万四千六百五十余之疫神」から御守護とあります。

牛頭天王というのは京都祇園神社（旧八坂神社）の祭神でもありますが、元は祇園精舎（ぎおんしょうじゃ＝釈迦のために建てられたお寺）の守護神でした。

大山祇神社は、山で働く人たちの守護神として信仰を集めていましたが、以前からの信者も次第に減ってきて祭事を行うことも困難になってきたことから、再び恵比須神社に合祀されました。



<三山神社護符・大山積大神登山無難御守護札>

<古平高校脇の大山祇神石碑>

冬の教室風景

竹内コト

長い廊下を行くと、私たちの教室があります。片側にずらっと教室が並んでいますが、教室に入ると、かじかんだ手をストーブが暖めてくれます。

そのころは「小使いさん」と呼ばれて、生徒たちからも親しまれているおじさんが居て、毎朝早くから生徒が来る前に、小さく割った焚き付けを持って教室のストーブに火を入れて廻ります。

「おじさん」と声をかけると、「おはよう、じきにあったまるからね」と言っては、忙しそうに次の教室へと行きます。

ストーブは、子どもが抱えることが出来ない程の大きさでした。寒い日などは廊下側の生徒から順に、先生がストーブの側で暖まるようにしてくれます。

そうしていると、ストーブの側にある弁当棚からいろいろな匂いがしてくるのです。中でもたくわんはぷんぷんと強烈に匂ってきます。

やがてお昼になると、暖められた弁当を開いて食事ですが、今度は隣の人とおかずの交換などをして、楽しい食事のひとときを過ごします。

弁当箱もまたいろいろで、丸味のあるもの、四角形のもの、真っ白なハンカチにくるんだり、ふろしき包みだったり、冬になると毛糸で編んだ袋に入れて来る人もいて、少しでも暖かい弁当を食べようと、それぞれが工夫していました。パンはまだ食事としての習慣はなかったようです。

楽しかったのは、教室で先生と一緒に弁当を食べるときです。授業中とはまた違って、父や母のように優しく接してくれました。先生も気楽に話しかけてくれたりして、とても和やかな雰囲気だったことが思い出されます。

学校で一番辛かったことは、冬のぞうきん掛けでした。ストーブも消えてしまった教室や廊下で、冷たい水でぞうきんをしぼるので手もかじかんでしまいます。風が吹くと窓が音をたて、すき間風が容赦なく吹き込んでくる校舎でした。雪も今より多かったような気がします。

教室や廊下、運動場などに張り出された図画、習字などの作品を友達と一緒に見ながら、冷えた校舎の中で春の来るのを待っていたものです。

今では、遠い昔のことのように感じております。

※（一ページ四段目から）

ご朱印をいただきましたのでろしくお願い申し上げます。

以上

明治四年辛未九月

古平郡弁才泊佐吉船

沖船頭　豊次郎

船宿　三国屋利兵衛

前書の通り願い出があり、吟味したところ相違ない

折笠源右衛門 ㊞

中畑亮之進 ㊞

◆

編集雑記

▼昔から、雑誌など新年号といえばページ数も増え、それに付録もどっさり付いてきて、お正月の楽しみを倍増させてくれたものです。『せたかむい』も一二ページとささやかですが新年を祝いました。気がつくと三月で一五〇号となります。一つの節目でもありますので増ページしましたが、読みごたえを感じてもらえれば幸いです。

▼三月六日は暦で啓蟄（けいちつ）とあり、永い間冬ごもりしていた虫が春めいて来たので地上に顔を出す、ということです。例年だと北海道はまだ深い雪の中ですが今年は文字通りの暖冬で、本州並みに旧暦での季節感を味わうことができそうです。

▼古平の戸数は一月現在で二〇五八戸ですが、『せたかむい』は毎月六〇〇部印刷しています。八〇部程が町外に出ていますが、何とか千部ぐらいまで増やしたいと考えています。それにはまず内容が第一と、夜な夜な思いをめぐらしています。

古寺を旅する

室谷忠雄

南禅寺はもともと禅の寺で、臨済宗の大本山です。

平成三年四月、私は一週間の予定で、妻と二人でフェリーに車を乗せ旅立ちました。

京都に着いて、とりあえず二条城の見学に行きましたが、大勢の中・高校生が修学旅行に来ていました。二の丸御殿、本丸御殿を見て回り、北海道から出たことのない妻は建造物の大きさに圧倒され、その歴史に驚いていました。

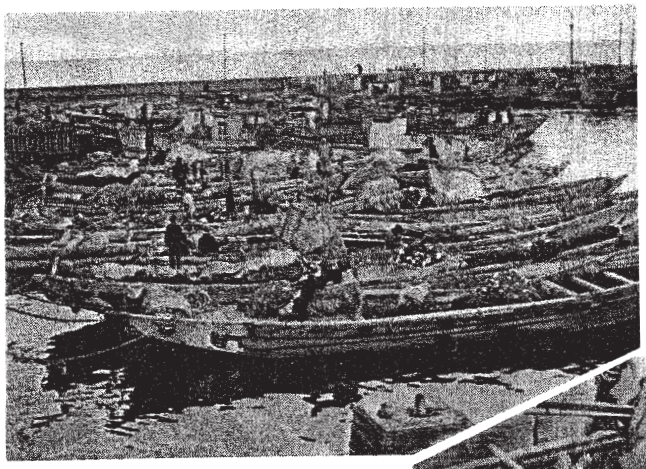
翌日は錦小路をぶらぶらして京菓子を買ったり、コーヒーを飲んだり京ブラを楽しみ、暑いなぁと思って、温度計を見てびっくり、二九度。急に汗がふき出して、二人で「暑い、暑い」と言いながら、南禅寺に向かって歩き出しました。

拝観をして、方丈の入口で「お茶はいかが?」と言われ、何の音も聞こえてこない方丈の大回廊に座布団を敷き、名庭園の砂紋を見ながら飲んだ一服の抹茶は、二人にとって枯山水にも増して格別なものでした。

約一二万平方メートルといわれる広大な境内にある、琵琶湖疏水のれんが造りの水路閣が風情に調和し、水音をたてて現在でも使われています。

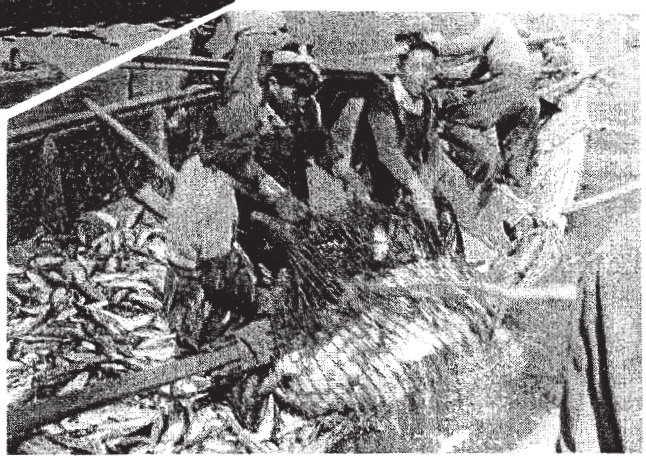
庫裏の裏山に登る細い道を行くと中腹に、欠けた古い地蔵菩薩が六体並んで立っています。後年、妻に花模様の着物を六枚作ってもらいこの地蔵さんに着せて来ましたが、二、三年経って行って見ましたら、また元の地蔵さんに戻っていました。

南禅寺へは一日は普通に拝観し、一日は朝に拝観すると、静寂の中で朝の風、小鳥の声に不思議な感動を味わうことができます。



古平のにしん漁
写真集〈第2集〉

戦後のにしん漁



〈第1集〉を見て「懐かしい写真だネ」と好評でしたので、続いて戦後のにしん漁を追加し〈第2集〉を出すことにしました。にしん漁の写真だけではなく、関係ある資料もいろいろと紹介しています。

にしん漁を体験した人も少なくなってしまいました。

成人の日に思う

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

成人式は、二十才に達し、社会人となった若者を国が祝う厳粛な式典なのに、式場で罵声を上げ、クラッカーを鳴らし、果ては酒を回し飲みする等、式典に警官を導入するという大混乱が報道されている。

報道されたのは、ごく一部であり、一部の心ない者の行動によるものであろうが、残念ながらこの傾向は後を絶たない。

こうした社会秩序を無視した若者の暴挙には、成人としての自覚が微塵もなく、将に暴虐無人の徒としか言いようがない。

大人としての自立を誓い、祝いあう式典に

・保護者との同伴

・有名タレントの高価なショー

・出席者えウン万円のお祝い

という若者に媚びた主催者の企画こそ、成人式の名に逆行する発想と思えてならない。

そんな思いで新聞やテレビを観ていたら、何時ぞやもこんな思いをした事に気付き、古いノートをめくったら、三十六年前の頁に、今回と同じような散文がしたためられていた。

毎年、悪評に耐え、貴重な予算を費やしてまで「成人式」を続ける事の是非を、この際、原点にかえって再考すべき機会ではなかろうか。

そして、中止もまた勇気ある決断かも知れないと思った。

昭和四十一年一月
稲倉石鉱山にて記

おめでたい成人式なのに、晴れ着を切られたり、墨汁で汚されたりと、そんな悪事が三面記事をにぎわしている。

また青春の思い出として、華やかな振り袖姿で着飾るのも結構だが、度が過ぎているような気がする。

今日、ふと目にした新聞の片隅に、僅か二段の見出しで『不幸な人を忘れぬように』と題した記事が、私たちに大きな反省と問題をなげかけていた。

それは

「成人式の晴れ着も、歯の浮くような祝辞も悪いとは言わないが、ベッドの上で、寂しく成人に達した原爆被害者のいる事を忘れないで下さい」

と。

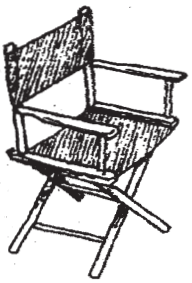
胎内被爆児が丁度成人になったのです。被爆児の中には、罪なくして心身障害を抱え、働く職場も少なく、貧しい生活をおくり、テレビが唯一の娯楽なのに、それすらも買ってやれない家庭が多いという。

そして、その母親はこう結んでいた。

「成人式には子供を連れて行きません。お偉い方のお世辞を聞くよりも、二十年も病気に耐えた子供に、よくぞ頑張ってくれたと、二人だけでお祝いをします。

親は、子よりも早く召されるのが順序ですが、私は、回復が望めない子供を見送ってから、安堵してこの世を去りたいと、神仏に祈っています」

今なお戦争の痛手を抱え、少ない援助で苦しんでおられるこの記事は、好景気に浮かれがちな私たちに、尊い教訓を静かに訴えているかのようだった。



短歌

古平町岬短歌会

大寒の日差しあかるく雪原を駆くるうさぎの影のおどれり　東　美知

厳寒の稲倉おろしが吹き荒ぶ古平河口にケアラシの立つ　竹内コト

客船(ふね)にて来る叔母を待ちにき本陣の浜に幼き貝殻(かひ)拾ひつつ　池田テル

海沿いの雪崩防止の鉄柱に大氷柱の垂れて春まだ遠く　榊佳代

務めし頃覚えし指差し確認を声出だし成す日に幾度か　鈴木時子

バスの窓曇るを指にふきゐつゝ古平の湾をかこむ灯をみる　堀典子

四季咲ける花にならひて我もまた精一杯に生きてゆきたし　田中香苗

真冬の如吹雪の今日も日を違(たが)へず鍼灸師は来て下さりぬ　奥山きよみ

早朝の深雪踏みて新聞を届けくるるに今に会はざり　山口スヱ

俳句

古平ホトトギス会

天帝の怒りか吹雪おさまらず　斉藤波留

たまさかの日射しまぶしや春隣り　山口悦子

供へたる南天の実を灯しけれ　越野敏雄

温め酒せしあの頃の銚子あり　大和田絵伊

走歩はじめ迎えてくれし蕗のとう　福井幸平

窓際の犬ながくと陽なたぼこ　関口勝志

夫よりも齢を重ねし初日記　よしざきり

石倉の扉の重し燕(つばくらめ)　仲谷比呂古

軒下に寒鱈を干す両隣り　室谷弘子

文芸云欄近況

◇短歌や俳句の会の方々が毎号紙面を飾ってくれておりますが春先のようなこの時期、体調をくずされた方がおられて、福井幸平さん二、三日入院、竹内コトさん入院、中村樺宵（憲一）さんも入院されているそうです。一日も早い全快を願っております。

◇古平ホトトギス会では、新入会員を歓迎しております。いよいよ海岸や野山を散策するに好適な季節となります。意欲を持って新しい楽しみや趣味の発見いかがでしょう。